



日本纖維機械学会第78回年次大会

第78回年次大会実行委員会

1. はじめに

2025年6月5日（木）・6日（金）の二日間にわたり、一般社団法人日本纖維機械学会の第78回年次大会が大阪科学技術センター（大阪市）にて開催されました。

本学会の年次大会は、纖維機械をはじめ、纖維および纖維製品に関連する幅広い分野を網羅し、産官学の垣根を超えた研究者・技術者の交流の場として、毎年多くの参加者を迎えてます。近年では、学生が企画・運営に携わる学生セッションも設けられ、世代や立場を超えた活発な議論と交流が行われている点も大きな特色です。今回の大会では、研究発表件数127件、参加者数310名を数え、参加者間での意見交換が非常に活発に行われました。年次大会実行委員長として、これほど多くの皆様にご参加いただけたことは、誠に望外の喜びであり、紙面をお借りして心より御礼申し上げます。

本大会にご参加いただけなかった皆様、またプログラムの都合により聴講が叶わなかった皆様、さらには大会の熱気を改めて振り返りたい皆様のために、各セッションの様子をオーガナイザよりご報告いただきます。

【中西康雅（三重大学）】



2. 特別講演

第78回年次大会の特別講演は、村田機械株式会社代表取締役社長 村田大介氏にお願いした。講演の冒頭で、村田大介氏は1987年に村田機械に入社後、主に情報機器部門を担当されていたが、1996年に纖維機械事業部長に就任するにあたり、化合纖維機械および化学纖維の糸作りについての知識がほとんどなかったため、本学会のテキスタイルカレッジを受講され、1997年の7月、暑い時期に大阪科学技術センターに通った逸話を披露され、なごんだ雰囲気の中で演題『当社の4つの課題』の講演が始まった。

村田機械の前身である西陣ジャガード製作所の創業が1935年であり、同社は今年で90周年を迎えるとのことで、前半は5つある事業部の中で、特に纖維機械に重点を置きながら沿革を紹介された。

後半は、村田大介氏が入社してから今までの約35年間とこれからの経営環境について言及され、同社の4つの課題（国際化・SCM・イノベーション・多事業経営）について述べられた。1990年の冷戦終了とともに歴史的にも稀有な単一世界が出現し、先進国から新興国へ生産・所得が大移動する変化が起きた。この結果、世界人口も53億人から2020年には約25億人増加し78.5億人となり、日本では失われた30年などと言われるが、世界では生活水準があがり、非常にエキサイティングな30年間であった。ただ、2020年以降は、感染症発生、戦争勃発、格差問題、環境意識の変化等により複雑な分断の時代に移行したと述べられた。AIの発展、少子高齢化・労働力不足により、新しいモノづくりを模索することとなり、同社にとって解決すべき4つの課題があると示された。まず「国際化」については、市場は海外にあるので海外に出ていくという同社の気風（DNA）を紹介した。コアとなる設計・製造は出来るだけ日本で行うが、販売とサービスは現地に根差すため、現地経営者を継続的に育っていく重要性を説かれた。「SCM」については、キーコンポーネントの独自開発が重要で、日本の製造業が

衰弱する中で海外調達する場合の品質保証と安定供給の重要性を説明された。「イノベーション」については、新興メーカー・巨大専業メーカーと対するために新しい技術の創造がポイントで、新規技術開発のスピードと行動力が重要であるとした。景気変動を相殺し、海外技術を導入するには、「多事業経営」が必要と判断したが、経営資源の分散、部分最適と全体最適をどうやって成り立てるかが課題であると述べられた。

この複雑な分断の時代、環境が激変する中で、90周年を迎える今後さらに成長していくためには、色々な事業を我慢しながら続けていき、やみくもに対応するのではなく、方向性をもって対応し、個人的にも会社的にも質的に成長することが重要であると述べられた。

講演の最後には、発表資料の最終頁に記載された言葉、『革新の分岐点』についての説明があった。複雑な世界の中で成長していくためには、お客様に寄り添い、我慢強く、コツコツと対応していく事は重要であるが、それだけでは十分ではなく、つねに新しい技術を創造していく事がポイントである。そのために、新しい技術の創造、革新の分岐点を作ることが重要であると締めくくられた。

【太田成利（村田機械）】



3. テキスタイル・アパレル科学と工学セッション

テキスタイル・アパレルの科学と工学に関するセッ

ションでは、2日間にわたり合計10件の研究発表が行われた。内訳としては、1日目に4件、2日目に6件の発表があり、それぞれの発表に対して活発な質疑応答が交わされた。発表内容は多岐にわたり、主に以下のようないくつかのテーマが取り上げられた。
 ①テキスタイルの評価方法に関する研究として、難燃服の遮熱性評価や、背広服用生地における放熱性の評価手法が紹介された。
 ②テキスタイルの開発・性能評価として、導電性繊維を用いた電極や繊維アクチュエータの創製に加え、インナージャケットに用いる中綿素材の調湿機能に関する検討が報告された。
 ③機能加工の分野では、マットレス用ポリウレタンフォームへの通気性付与や、梳毛布のアルカリ浸漬処理による物性変化など、加工技術を通じた性能の向上が報告された。
 ④サステナブルファッショングに関する研究として、消費者のエコ意識と実践行動に関するアンケート調査があった。
 ⑤被服構成として、パターン生成手法の開発と有効性について報告された。

聴講者は、1日目が30～40名程度、2日目も午前中は30～40名程度と盛況であったが、午後にはやや減少し10名程度であった。それでも各発表に対しては複数の質問が寄せられ、活発な議論が展開され、発表者・聴講者の双方にとって有意義な時間となった。特に、熱中症対策を含む温熱快適性に関する研究は、全体の半数近くを占め、関心の高い分野であることが伺えた。また、本セッションは例年通り、学生による発表が全体の半数以上を占めており、若手研究者が研究成果を発信し、他者との交流を通じて研鑽を積む貴重な機会となっていた。今後も本分野の発展とともに、こうした場が若手育成の機会として継続されることが期待される。

【丸 弘樹（信州大学）】

4. 織維機械の科学と工学セッション

織維機械の科学と工学セッションでは、2日間にわたり全11件の研究発表が行われた。第77回(15件)に比べ発表件数が減少したものの、会場には常時20名程度の聴講者が参加し、トラブルもなく無事に閉会を迎えることができた。

本セッションでは11件の発表のうち企業から5件、大学・高専から6件の発表があった。発表内容は、織維機械の性能に関することとして、自動ワインダーのボビン供給方法の開発(吉岡ら)、合成繊維の紡糸延伸における評価装置の開発(辻)、糸供給ノズルにおける糸挙動(谷内ら)、高分子溶融体における三次元逆押出問題での粘弾性流動解析(田上ら)、仮撲加工

機の撓り抵抗および糸形状の評価方法（竹下ら, 吳屋ら）、糸の動的挙動解析による編地不具合の原因推定（若松ら）、合織巻取機におけるパッケージ周辺の流れ解析および風損動力の低減（喜成ら）が発表された。また、繊維機械の運用を支援する情報システムに関することとして、機械の安定稼働と省力化をサポートする IoT 総合管理システムの開発（志賀）、プラウザ上で動作する織方図描画ソフト（松浦）などの製品紹介もあった。これらの発表に対しては、合計 25 件の質疑応答があり、活発なディスカッションが繰り広げられた。

以上のように、本セッションでは繊維機械の性能向上、省力化、情報システムの導入といった多様なテーマが網羅しており、产学双方からの積極的な取り組みが顕著に見られた。活発な質疑応答からも参加者の関心の高さがうかがえ、次回に向けて技術発展と応用の広がりが大いに期待されるセッションとなった。

【金田直人（福井工業高等専門学校）】



に至る広範なセルロースナノファイバー (CNF) の新たな繊維長推定法を提案した。森らはこの繊維長推定法において、さらに CNF 分散流体中の繊維の配向状態と温度の関係を明らかにした。Ling らは抗菌剤の銀ナノ粒子を含む PVA ナノファイバーに卵殻膜を混合することで、銀ナノ粒子分布の均一性と安定性を向上させた。Fanghua らは多孔質カーボンナノファイバーと多孔質 PVDF ナノファイバーの複層膜を製造し、食用油の効率的な濾過に応用した。Xiong らは 2 次元メッシュ構造を有する PVDF / ドーパミン複合ナノファイバー膜を製造し、高感度フレキシブル圧電センサーを開発した。神田らはマイクロ湿式紡糸法による PVA 繊維の製造において、凍結融解処理を施すことでの纖維の破断ひずみとタフネスを向上させた。岡本らはマイクロ湿式紡糸法によるポリ乳酸繊維の製造において、ポリ乳酸の分子構造が繊維の物性に与える影響を明らかにした。中根らは帯状炭酸ガスレーザ溶融静電紡糸法を用いてステレオコンプレックス型ポリ乳酸フィルムを製造し、耐熱性の改善を図った。山下らはラットを用いて CNF の鼻部曝露吸入試験を行い、肺組織の顕微鏡観察により CNF の生体安全性を評価した。向井らは高粘度 CNF 懸濁液の基本的な脱水挙動を究明するとともに、正浸透圧脱水法を用いた超省エネ脱水法を提案した。以上の研究内容を大きく分けると、繊維の機能化と応用 5 件、紡糸方法の検討 3 件、CNF 関連 4 件である。【向井康人（信州大学）】

5. ナノファイバーセッション

ナノファイバーセッションは B 会場にて、1 日目の 6 月 5 日（木）午後に 4 件、2 日目の 6 月 6 日（金）午前に 4 件、午後に 4 件、計 12 件の口頭発表を実施した。これは、すべてのオーラルセッションの中で最多の発表件数に当たり、この分野の関心の高さがうかがえる。この 12 件はすべて大学による発表で、発表者の所属の内訳は、信州大学が過半数の 7 件を占め、あとは愛媛大学 2 件、岡山大学 2 件、福井大学 1 件であった。信州大学は金翼水卓越教授を中心としてナノファイバー研究の世界的拠点の一つに挙げられるが、最近この分野の研究者が信州大学に集まるようになったことでナノファイバー研究がますます活性化され、このように発表件数にも表れることとなった。12 件のうち外国人研究者／留学生による英語での発表が 5 件あり、12 件の男女の内訳は男性 8 件、女性 4 件であった。このように、多様性のあるセッションということができるが、一方で、産・官からの発表が無かつた点は課題である。

以下、発表内容について発表順に簡単に述べる。Ullah らはイライト / PCL ベースの食品包装材を製造し、生分解性であることに加え、高い防水性と気密性を達成した。Khalid らは Cu(II) 錫体 / PCL ナノファイバー複合材料を製造し、DDS における高度な薬物送達制御と長期薬物放出を可能にした。田野らは複屈折による配向度の測定により、長繊維長から短繊維長

6. スマートテキスタイルセッション

第 78 回日本繊維機械学会年次大会において、スマートテキスタイル技術に関するセッションが開催された。本セッションでは、センシング技術、エナジーハーベスティング、導電性繊維の応用、労働環境下での安全評価など、多様な観点からの研究発表が行われ、同分野の技術的成熟と応用展開の広がりが印象づけられた。

セッション前半（座長：桑原教彰）では、まず、SUMINOE 社による水濡れ検知布帛「Swetty」の取り組みが紹介された。布帛構造を用いて水濡れを感じる技術は、介護や衣料など日常生活での応用が期待される。続いて、大阪大学よりスマートウェアを活用した職場環境の評価と安全管理に関する実証的研究が発表され、リアルタイムでの生体情報収集と安全性評価の可能性が示された。さらに、京都工芸纖維大学からは、 $100 \mu\text{W}$ を超える連続給電が無線で可能となるエナジーハーベスティング技術について報告があり、スマートテキスタイルの電源自立化に向けた技術的進展が伺えた。

休憩を挟んだ後半（座長：石井佑弥）では、まずウラセ社による高耐熱性と高強度を兼ね備えた導電糸の開発が発表された。過酷な環境下でも使用可能なフレキシブル導電素材は、今後のウェアラブル機器開発にとって不可欠な素材である。続いて、京都工芸纖維大学から、無線 LAN センシングによる呼吸数推定に関して導電性纖維が与える影響についての報告があった。導電性の衣服を着用することで呼吸数の検出が難しくなるという知見が得られ、無線 LAN センシングにおけるプライバシー保護手段としての可能性が示唆された。最後に、産業技術総合研究所より、ニット構造を活かしたウェアラブルセンサの電気特性と測定性能に関する研究が紹介され、素材構造とセンシング機能の融合による新たな展開が期待される内容であった。

全体を通じて、各発表は実用性の高いアプローチに立脚しており、スマートテキスタイル技術が社会課題の解決に向けて着実に歩みを進めていることを感じさせた。今後もこうした基礎研究と応用研究の両輪が連携し、スマートテキスタイルのさらなる発展が期待される。

【桑原教彰（京都工芸纖維大学）】

7. 環境技術セッション

今回の環境対応技術セッションでは、次の3件の発表が行われた。まず「ラマン分光法による纖維混用率測定技術の開発」では、薬品を使用せずに、短時間で測定可能なレーザーラマン法による纖維鑑別、および混用率測定法の開発について発表された。酸やアルカリの有機溶剤を用いる方法は、溶剤も濃度により作業にリスクが伴ううえ、纖維を1種類ずつ溶解するため多くの時間を要する。また纖維には定量が困難な組み合わせもある。そこで本開発では、空間分解能が $1 \mu\text{m}$ 程度で、試料表面を分析できるラマン分光法に



よって、測定に適する試料の調整方法および解析方法が検討された。結果として、染色されていないポリエステル、綿2種類混の試料に対して実用レベルであると示された。

次に「炭素纖維端材の射出成形材料への応用」の発表は、特に大部分が埋め立て処理になっており、今後はリサイクルしていくことが必要不可欠である炭素纖維強化プラスチック材料（CFRP）の廃材について、オンラインブレンド射出成形と CFRP シートとのハイブリッド成形技術および物性評価によるリサイクル性について解説された。取り組まれた端材のブレンド射出成形試験では、引張特性、曲げ特性とともに、市販の成形材料と同等の評価であり、実用において十分な強さであることが示された。また取り組まれているハイブリッド成形の事例も紹介され、バージン材が加わることで強度低下を抑えることも述べられた。

3つ目の「廃材ウールを利用したクッションの褥瘡予防に関する性能」では、廃棄されるウールにより作成されたクッションを試料として、褥瘡予防に関する材料特性について検証された。看護の現場において褥瘡を予防することは重要な看護の課題であり、先行研究から、褥瘡は体圧と密接な関係があるとされているが、クッションの沈み込みに着目した研究は少ない。今回、廃材ウール、床ずれ防止枕パッド用、椅子子用、医療介護用体位変換クッションの5種類から得られた圧縮特性評価値の分析において、廃材ウールを用いたクッションは、厚さ変化が大きく体圧が低い結果が得られ、褥瘡予防性が高いことが示された。

【森下あおい（滋賀県立大学）】

8. 繊維強化複合材料セッション

纖維強化複合材料のセッションは初日に開催され、15件の発表がなされた。ここでは、発表された順に概要を報告する。

まず、リサイクル炭素纖維を用いた FRP の応力解

析を通じて、撲り角や纖維含有率の影響を検討した研究や、CFRTP の力学特性向上を目的として、撲り構造の適用および纖維体積含有率の影響を評価した研究成果が報告された。また、ロボットアーム用複合ケーブルにおける素線応力を有限要素法により解析し、設計パラメータの最適化を図った研究成果も紹介された。

環境に配慮した研究事例として、バイオベース由来のポリアミドを炭素纖維と混纖させてチョップドランダムシートの成形性と力学特性やリサイクル炭素纖維をポリプロピレン纖維で紡績した複合化とその材料にオーバーインジェクションで一体成形する材料開発について報告された。またポリプロピレンと纖維の界面接着性に重要な役割となる無水マレイン酸変性の重要性や、射出成形時の樹脂内部に分散する纖維配向を予測する粒子法の有効性が示された。

水素蓄圧容器の実設計にマルチスケール解析を活用して、計算コスト削減を試みると共に、フープ層とヘリカル層に関する設計マップを作成する取り組みが報告された。また、CFRTP パイプに新たな価値を付与させるための基礎研究として異なる特性の樹脂をハイブリッド化させた研究発表や、CFRTP パイプの引き抜き成形時における品質安定化を目的とし、成形時におけるスラッフィングの発生挙動のメカニズム解明に関する基礎研究報告が行われた。

ガラス纖維強化複合材料において纖維の表面処理剤の違いによる界面接着性や湿熱劣化に関する実験報告がなされた。また、ガラス纖維強化熱可塑複合材と木材との積層材について曲げ特性の評価や予備加熱温度の影響に関する報告が行われた。さらに、ノンクリンプ UD 織物を用いて製織と引抜成形を同時に使う装置の開発と力学的特性の評価について報告があった。また、接着強度と易解体性を両立する GFRP 接着継手の強度・熱的特性について研究報告が行われた。

【植松英之（福井大学）、大谷章夫（京都工芸纖維大学）、倉敷哲生（大阪大学）、谷口憲彦（アシックス）】



9. 伝統的纖維製品と匠の技セッション

「伝統的纖維製品および匠の技」セッションでは6月6日（金）の午前中に3件の研究発表がなされたが、大会場における早朝からの発表のため、会場は閑散としていた。

1件目は、「体験学習における学習態度におよぼす影響」と題して、先行研究である「小学生を対象とした組紐ディスクを用いた組紐作成のワークショップに関する研究」で得られた結果をもとにクラスの規模を30名以下とし椅子に座れる教室で体験学習を行った。その成果が認められ、立ち歩いて組紐を組む児童は見られず、組み始めて40分経たところで、立ち上がる児童が最多で、これは学校の授業の影響で、集中力が切れるからであろうとしていた。

2件目の発表は「小学生の組紐制作時の環境が組まれた組紐の組み間違いに及ぼす影響」いう題目で、2つの異なる環境で組み方の指導を対面で行った研究である。環境Aは座卓で、正座、胡座、横座で1年生～6年生まで、環境Bは小学の4年生～6年生を対象とし、学校の教室で、机と椅子を用いて椅子に座って組紐を組んだ時の間違いを比較した結果、環境Bで行われたほうが間違いの少ないことが報告された。ここにも現代の生活様式の影響が認められたとしている。

衣食住の生活様式が大きく変化した現代でも、和服に対する関心は日本人だけではなく、外国人にも非常に高い。その和服を着るのに欠かせないものが組紐である。研究者には伝統的技術を次世代に繋げようとする熱意は感じられるが、そのためには、研究の初めに被検者達に組紐の実物を見せ、組紐の歴史、用途、特徴等を説明してほしかったという意見が会場から述べられた。

3件目の発表は「高台を用いた組紐作製における熟練者と非熟練者の作業工程の比較」である。この研究では熟練者と非熟練者それぞれ1名ずつの組紐作製工程をビデオ撮りし、比較した研究であるが、被検者がそれぞれ1名と少ないため、そこから結論を導くことに問題があると思われた。

【岡本陽子（神戸女子大学）】

10. 染色・機能加工セッション

染色・機能加工セッションでは、大会1日目および2日目にわたり、計10件の研究発表が行われた。1日

目に4件、2日目に6件の発表があった。今回のセッションでは、機能加工に関する発表が大半を占めたが、染色関連の研究も数件見られた。

1日目の発表は、撥水・撥油加工へのフッ素化合物の使用低減、クリーニング技術を応用した無水染色、染色機構に着目した天然染料の耐光性向上、金属アレルギー疾患の予防を目的とした金属イオン捕捉・検知機能の付与など、環境や人体への配慮を意識した内容が中心であった。

2日目は、いずれもサステナビリティや高機能性を志向した先進的な研究内容であった。特に注目されたのは、超臨界二酸化炭素を活用した染色布の脱色や機能性ナノ粒子の固着、色強度の制御といった、従来の水を大量に使用するプロセスに代わる環境負荷の少ない加工技術である。これらの研究は、脱炭素社会や繊維廃棄物の課題を背景に、マテリアルリサイクルの実現や無水加工の推進を目指しており、実用化に向けた応用性の高さを感じさせた。また、コレステリック液晶を形成するセルロース誘導体による構造発色繊維や、短纖維ジユートから作製したナノファイバーエアロゲルなど、新素材の提案もあり、天然由来材料を活用した持続可能なものづくりへの視点が光った。各発表では、ハンセン溶解度パラメータを用いた凝固浴や吸着材の選定といった化学的アプローチに基づく丁寧な検討が行われており、素材・加工プロセス・環境のバランスが取れた内容ばかりであったことが印象的である。

いずれの発表においても活発な質疑と議論が交わされた。特に2日目は、発表者に若手の学生や教員が多く、質疑応答においても自らの研究意図を的確に説明していた。環境・資源問題への意識が高まる中、持続可能な繊維加工や新素材開発はますます重要性を増しており、本セッションで紹介された技術群は、その先導的位置づけにあると言えるだろう。

【上坂貴宏（京都市産業技術研究所）、松原孝典（産業技術短期大学）】

11. 産業用繊維資材および不織布のセッション

「産業用繊維資材および不織布のセッション」は大会初日の午前中に開催された。セッション開始当初から約25名ほどの聴講者があり、セッション全体を通じて盛況であった。

内容は、一般講演3件と基調講演1件であった。まず、一般講演の内容は、以下のとおりである。①ポリ

エステル製テニスガットについて、ガット張替を想定した応力の緩和過程を調査した結果の報告、②ニードルパンチ不織布について、実験方法の工夫により両面からのニードルパンチ操作を実現させ、操作条件と不織布の物性との関係について検討した報告、③ポリプロピレンとポリカーボネートを用いた、糸の太さが異なるメルトプロローン混纖不織布に関する研究報告。それぞれ興味深い内容の発表であり、様々な質問が飛び交ったり、立ち見がでたりと、活性度の高い会場であった。

基調講演は、「不織布業界の現状と最近の国際見本市に見る不織布技術動向」の題目で日本不織布協会の矢井田修先生にご出講いただいた。会場の座席は聴講者でほぼ埋まり、関心の高さをうかがわせた。講演では、現在の日本や世界の不織布生産の動向や状況について、豊富なデータを基に解説がなされ、さらに最近行われた国際見本市で見られた不織布技術の動向についても解説がなされた。現在の不織布技術の動向として、①複合化技術の多様化、②サーマルボンド技術の多様化、③リサイクル関連技術の進展、など6つのポイントを挙げられた。製法、材料、構造など「複合化」が昨今の不織布技術のキーワードとなっている印象を受けた。

産業用繊維資材や不織布の分野は、基礎研究を実施している研究者が少なくなったこともあり、研究発表自体は少ないが、会場は聴講者であふれ、関心の高さは変わらない。「産業資材」「不織布」というキーワードを含む関連研究の発表も大歓迎なので、次回は、ぜひ多くのみなさまに研究発表をしていただき、このセッションを盛り上げていただきたい。

【田上秀一（福井大学）】



12. 製品紹介セッション

今年度は企業より6件、公設試より2件の口頭発表があった。また、口頭発表との重複を含め10件のポスター発表があり、活発な意見交換が行われた。口頭

発表について簡単に紹介する。

- ・村田機械（株）：カーボンナノチューブ（CNT）紡績糸を用いたウェアラブルセンサについて。炭素繊維100%の紡績糸が非常に興味深く、身体の動きに伴うニットの伸長による電気抵抗値の変化により、歩行などの運動を精度良くセンシングすることが可能な技術。
- ・（株）アタゴテック：産総研の特許技術を用いたテクスチャ画像中の欠点の高速自動分類技術。
- ・兵庫県立工業技術センター：複数の廃棄衣料由来の再生糸からなる合撫糸と製品サンプル紹介。
- ・TMT マシナリー：冷却、モノマー吸引、オイリングの各機構を改良したナイロン用新型紡糸装置の紹介。
- ・カトーテック（株）：硬質素材にも対応する次世代触感評価技術の紹介。触感を司る人間の受容器がとらえる周波数帯域の情報を解析し、これまでKESでは評価出来なかった「硬い」素材にも対応。
- ・福井県工業技術センター：ニット吸音材に不定形断面加工糸を用いることで、吸音性能を向上。
- ・日本ダム（株）：製織時に発生する捨て耳を反毛再紡績して緯糸に使用した100%環境配慮型材料使用のラベルについて紹介。独特のランダム感を持ったラベル意匠は、SDGs対応製品であることを見た目でアピールできる。
- ・東レ（株）：シルク調のPET素材「シルックTM」の発売60周年にあたり、一部植物由来原料に置き換えた上、表面凹凸の異なる異形断面繊維を混在させた「シルック未来TM」の紹介。高級感を持った自然な光沢と、裾が擦れ合う際の絹鳴りも再現。

ポスター会場においても数多くの実物展示がなされ、参加者も多く盛況であった。

【東山幸央（兵庫県立工業技術センター）】

13. SDGsセッション

日本繊維機械学会では、2019年度にSDGs委員会を立ち上げ、SDGsを学会活動に積極的に組み込み、Textile Future 2030をキャッチフレーズに、SDGs実現に向けたメッセージを発信している。第74回年次大会（2021年）において「SDGsセッション」を新設し、5年目の本大会では、15件の発表を得て盛会裏に終えることができた。ご発表いただいた皆様、座長、SDGsアワードの審査委員、そして、本セッションにご参加いただいたすべての皆様に感謝を申し上げる。



本年度は、産業技術総合研究所再生可能エネルギー研究センターの吉田郵司氏にご参加いただき、「持続可能な次世代太陽電池の開発に向けて」と題したセッション基調講演をしていただいた。持続可能な太陽光発電が求められている中、社会や自然と共生する次世代太陽電池（軽量フレキシブルなシリコン太陽電池、有機薄膜太陽電池など）にフォーカスし、繊維・樹脂材料との接点についても取り上げられ、異分野でのコラボレーションが期待される内容であった。

本セッションはSDGsに取り組んでいる大学・公設試・企業等の様々な立場から語ることのできる多彩な討論の場となっており、当学会の特色の一つとなっている。京都市産業技術研究所から「効率的な製品開発支援のための繊維評価技術」について、東京都立産業技術研究センターから「自動車軽量化に資するCFRTP／AI合金接着技術の開発：ゼロエミッション東京の実現に向けた取組」及び「柔軟性を特徴としたSOFC用集電材の開発：ゼロエミッション東京の実現に向けた取組」について、岡山県工業技術センターから「銀ナノ粒子／セルロースナノファイバー複合体を用いた抗菌加工ジーンズの開発」についての発表があり、各地域での取り組みを知ることができた。また、大学での「廃棄消防服の劣化と廃棄方法の検討」に関する研究、産官学連携における「リサイクル炭素繊維を用いた疑似連続繊維テープの開発」に関する研究、試験機関における「MALDI-TOF-MSを用いた再生ポリエステル繊維の判別方法」についての研究発表もあった。さらに、企業のSDGsにかかわる取り組みとして、「繊維機械の異常診断」では繊維機械の不調を検出する最新システムの開発、「GOTS CSCS取得」では産地における複数企業の共同による規格取得の実例、「4000万点を扱うリサイクル 在庫処分会社からの進化」では在庫処分の様々な方法の開拓についての発表があった。

また、本学会の再生糸普及員会“Team再生糸”からは「廃棄衣料由来の再生糸の開発と普及」と題し

て、廃棄衣料から作成された糸の開発から、糸の物性、織物への適用、アパレルの開発までの一連の取り組みについて、一昨年から発表されている一連の研究の続きとして、「～再生糸から成る織物の洗濯耐久性～」「～ニットシリーズ Part1：再生糸の基本特性～」「～ニットシリーズ Part2：再生糸から成るニット布の物理特性と風合い～」の発表も行われた。さらに、本学会の衣 coromo @未来研究会からは、将来の衣服についての実際と探訪として「未来の衣服をデザインする（IV）－最新の宇宙服から“激変する環境に対応する未来衣服”を考える－」の発表があった。それぞれの立場におけるSDGsに対する熱い想いを受け取ることのできるセッションであった。

このセッションでは、SDGs達成に貢献する優れた発表（登壇者）に対し、SDGs委員会より「SDGsアワード」として表彰する制度を設けている。今回は6名の審査委員による厳正な審査の結果、次の3件をSDGsアワードとして選出した。

【井上真理（神戸大学）】

受賞者：峯 英一氏（東京都立産業技術研究センター）

発表番号：D1-05

題 目：柔軟性を特徴とした SOFC 用集電材の開発：ゼロエミッション東京の実現に向けた取組

受賞者：川畠智史氏（村田機械株式会社）

発表番号：D1-08

題 目：織維機械の異常診断

受賞者：山本昌一氏（株式会社 shoichi）

発表番号：D2-04

題 目：4000万点を扱うリサイクル 在庫処分会社からの進化

14. 学生セッション

学生セッションは、大会2日目の午前に「イトが結ぶ学生の輪～第六縕（かせ）ゼロから紡ぐ国産コットンの未来～」と題して開催されました。今回は学生委員がディスカッションを重ね、コットンをテーマに取り上げ、専門家の招待講演とパネルディスカッションという構成で開催された。開催にあたっては、日本綿業振興会様の協力を得るなど、多くの準備を要したもので学生委員の活動に感謝申し上げる。講演は奈良県

の畑で綿を生産しているH.A.M.A 木綿庵（ゆうあん）の代表・梅田正之氏を講師に迎え、綿の栽培を始めたきっかけから、栽培や普及に向けての課題、現在の木綿庵の活動まで、幅広い話題についてエネルギー的に講演していただいた。講演の中では実際に栽培している和綿や洋綿、木綿庵で栽培、紡がれた綿と工業的に生産された中間製品など実物を手にとって比較するなど聴講者の関心を惹くものであった。そして、学生委員を中心にパネルディスカッションのような形で質疑応答を重ねた。学生の視点から、綿の可能性、国産の長所、利点などの質問や他地域で綿栽培に取組む方からの質疑や感想などもあり、学生の狙いであった国産コットンの可能性について多くの話題に触れることができるセッションであった。日本の綿花産業と織維産業の未来を考えるといった大きなテーマであり、顧問の間では心配する点もあったが、学生委員の丁寧な打ち合わせとまとまりで、成功裏に終えることができた。この学生セッションだけに終わらず、今後の活動も期待させる素晴らしい学生セッションであった。

【松岡敏生（三重県工業研究所）】



15. ポスターセッション

ポスターセッションでは、若手研究者による学術研究発表コーナーに18件、企業による製品紹介コーナーに10件の総計28件の登録があった。

学術研究発表コーナーでは、ナノファイバー、織維強化複合材料、スマートテキスタイル、染色・機能加

工、産業用繊維資材および不織布等、様々な研究分野の発表があった。また、製品紹介コーナーでは、高耐熱高強力導電糸や、カーボンナノチューブを用いたニットセンサ、水濡れを検知する布状センサ等、柔軟な導電性繊維をセンサに利用する事例や、AIによるテクスチャ中の欠点の自動分類手法、廃棄衣料由来の再生糸やアップサイクル型のブランドラベルの開発、新しい触感評価技術等に関する発表もあった。

ポスターの発表件数については、当方の力不足により、残念ながら昨年の約半分となってしまったが、ポスター会場は、昨年と同程度と思われる数の聴講者で一杯となった。各ポスターの前では、セッション終了時まで、発表者と聴講者の間で活発な意見交換が行われていた。ポスターセッションは、口頭発表のような時間の制限なく、発表者と聴講者が、時には現物を手に取って観察しつつ議論することで、多様な意見を聞き、今後の研究の発展に有益な情報を得る場であると考える。今後も、このような意見交換を行う機会を提供していきたい。

【若松栄史（大阪大学）】



16. 日本繊維機械学会賞 「学術奨励賞」

学術奨励賞は、2025年3月31日時点において満35歳以下の若手発表者を対象とし、将来の学術的発展が期待される優秀な研究発表を顕彰するものです。応募のあった発表につきましては、審査委員会による厳正なる審査を経て、受賞者を決定いたしました。

本年次大会では、計23件の応募が寄せられました。まず、提出された発表要旨に基づく一次審査を実施し、これを通過した発表に対しては、年次大会当日に行われた口頭発表を対象とした二次審査を行いました。二次審査においては、より専門的かつ実質的な議論を通じて評価を行うことを目的とし、審査対象者には通常のセッション内にて発表いただき、審査員が各会場を巡回する形式にて審査を実施いたしました。

慎重かつ公正な審査の結果、以下の2件の発表が学

術奨励賞に選定されました。ここに謹んでご紹介申し上げるとともに、受賞者の今後のご活躍を心より祈念いたします。

【中西康雅（三重大学）】

受賞者：吉田香歩子氏（信州大学）

発表番号：E2-04

発表題目：オーバーレイマットレス用ポリウレタンフォームの無膜処理が熱移動特性に及ぼす影響

受賞者：松岡優仁氏（福井大学）

発表番号：F2-02

発表題目：コレステリック液晶を形成するセルロース誘導体を用いた構造発色繊維の湿式紡糸条件の検討

なお、本賞は年齢制限こそございますが、会員であればどなたでも応募いただけます。次年度におきましても、より多くの若手会員の皆様に積極的にご応募いただき、学術奨励賞への挑戦を通じて、研究活動のさらなる飛躍の契機としていただけますよう、切に願っております。

17. 日本繊維機械学会賞 「ベストポスター発表賞」

ベストポスター発表賞は、ポスターセッションの学術研究発表コーナーにおいて事前応募のあった35歳以下の若手発表者に対して発表内容を審査し、優秀なポスター発表者に授与されるものである。応募された9件のポスター発表を対象に、年次大会1日の決められた時間帯において実施した発表ならびに質疑応答について、複数の審査員により厳正な評価が行われた。各審査員の評価を元に審査委員会にて審議を行った結果、以下の1件がベストポスター発表賞として選出された。受賞者には、今後の更なるご活躍を期待したい。

【若松栄史（大阪大学）】

受賞者：井上隼輔氏（大阪大学）

発表番号：P1-02

発表題目：繊維強化複合材料による水素蓄圧容器のマルチスケール解析および設計マップに関する研究

18. 日本織維機械学会「学生奨励賞」

「日本織維機械学会学生奨励賞」は、日本織維機械学会賞「学術奨励賞」または「ベストポスター発表賞」に事前申請した学生会員を対象に、優れた発表をおこなった学生発表者に対し、年次大会実行委員会よりを授与するものである。この「学生奨励賞」は、日本織維機械学会賞「学術奨励賞」および「ベストポスター発表賞」に事前申請することで自動的にエントリーされる形で募集した。口頭発表、ポスター発表のそれぞれで厳正な審査を行った結果、下記の3件の発表を学生奨励賞に選出した。祝意をもってご紹介させていただくとともに、受賞されたみなさまの今後のご活躍を期待する。

【中西康雅（三重大学）、若松栄史（大阪大学）】

受賞者：谷口航大氏（大阪大学）

発表番号：C1-02, P1-04

発表題目：ロボットアーム用複合ケーブルの曲げ負荷下における素線の力学的特性評価に関する研究

受賞者：青池駿氏（岐阜大学）

発表番号：C1-06, P1-05

発表題目：ハイブリッド組物構造を用いたCFRTPパイプの成形性および力学的特性

受賞者：芝田悠二氏（信州大学）

発表番号：E1-03, P1-14

発表題目：ポリカーボネートの混纖率がポリプロピレンメルトブロー不織布の集塵性と通気性におよぼす影響

学生奨励賞の設置により、学生会員にとって贈賞のチャンスが増えたことになる。エントリー後の準備は大変と思うが、贈賞を受けるということは、自分の研究活動が評価されたことになり、色々なメリットがあるうえに、自信につながると思う。今後多くの学生会員の皆様に応募いただき、チャレンジしていただきたい。

19. 懇親会

今回は先にポスターセッションを実施、村田機械株式会社の村田大介社長の特別講演会に引き続いだ懇親会を開会した。まず、中西康雅実行委員長のご挨拶と

共に年次大会開催にあたり、参加者の皆さまへの謝意が述べられた。

続いて、田上秀一日本織維機械学会会長による乾杯のご発声で懇談がスタートし、会場のあちらこちらで参加者同士の活発な意見交換や情報交換で盛り上がった。学生をはじめ初めての参加者もすぐに打ち解け、飲み物と食事をとりながら様々な機関の方々と情報交換や名刺交換を行っていた。

懇談が一段落したところで、学会賞であるベストポスター賞の発表が行われ、受賞された「織維強化複合材料による水素蓄圧容器のマルチスケール解析および設計マップに関する研究」の大坂大学・井上隼輔様が登壇、喜びのコメントと指導教員への謝辞などが述べられた。

再び活発な懇談となつたが、多くの皆さまにご参加いただき、あつという間に中締めの時間を迎えた。三重県工業研究所の松岡敏生実行副委員長から中締めのご挨拶があり、一本締めを行った。名残惜しい雰囲気を残しつつ、懇親会はお開きとなった。

【東山幸央（兵庫県立工業技術センター）】



20. おわりに

第78回年次大会は、多くの皆様のご協力のもと盛会のうちに幕を閉じ、本報告記をお届けする運びとなりました。

本年次大会は、最新かつ最先端の研究成果に触れる機会であると同時に、参加者が一堂に会し、活発な意

見交換や人的ネットワークの構築を図る貴重な場でもあります。ご参加いただいた皆様におかれましては、本大会を通じて多様な知見を得られ、新たな研究開発や製品開発への展開、さらには新分野への関心や連携の契機となりましたならば、これに勝る喜びはございません。

また、本大会の運営は、学会員の皆様によるボランティア活動に支えられており、そこには本学会および繊維産業の発展に対する熱意と想いが込められております。今回の大会を通じて、そのような想いを改めて実感する機会ともなりました。

今後も年次大会が、繊維及び繊維機械の未来を語り合い、共に創り上げていく場として発展していくことを心より願っております。また、本報告記をご覧いただいた皆様には、来年度の大会にもぜひご参加・ご発表賜りますよう、お願い申し上げます。

最後になりましたが、本大会の開催にあたり多大なるご尽力を賜りました実行委員の皆様、事務局の皆様、受付・会場運営を担ってくださった学生の皆様、協賛企業の皆様、そして何よりも本大会を盛り上げてくださいました全ての参加者の皆様に、心より深く感謝申し上げます。
【中西康雅（三重大学）】

報告記

第78回年次大会「学生セッション」 イトが結ぶ学生の輪 第六総～ゼロから紡ぐ国産コットンの未来～

日本繊維機械学会 学生会（第五期）運営委員会

1. はじめに

日本繊維機械学会における学生主体の取り組みとして、2021年に発足した学生会は、繊維産業の未来を担う若手研究者・技術者の交流を促進し、学会の活性化を目的として、これまでにさまざまな企画を行ってきた。その一つである学生セッションは、今回で7回目の開催となる。

本年次大会では、「イトが結ぶ学生の輪 第六総～ゼロから紡ぐ国産コットンの未来～」と題し、日本の綿花産業に焦点を当てた学生セッションを企画した。綿花は私たちの暮らしに身近な繊維素材である一方、国内自給率は極めて低く、その多くを海外に依存しているのが現状である。一方で、持続可能な社会の実現や地域の活性化といった観点から、国産綿花の可能性に再び注目が集まりつつある。

今回の学生セッションでは、綿花栽培に携わる農家であるH.A.M.A.木綿庵（ゆうあん）代表・梅田正之氏をお招きし、パネルディスカッション形式で実施した。現場の課題や魅力について直接お話を伺いながら、国産綿花の未来について参加者とともに考える機会とした。多くの方々にご参加いただき、盛会のうちに終了することができた。ご参加いただいた皆さんに心より感謝申し上げる。

2. 当日のパネルディスカッションについて

パネルディスカッションでは、梅田正之氏による講演「国産綿花栽培の現状と課題、展望—栽培者の立場から—」が行われ、その後、参加者を交えての討議が行われた。

2.1 梅田氏の講演内容

梅田氏は、自身が心の不調を抱えた経験から、「こころが落ち着ける居場所をつくりたい」という想いを抱くようになり、自然と人とのつながりを重視した

「居場所づくり」に取り組む中で綿と出会ったという。綿のもつ温かみや素朴さ、触れたときの安心感に惹かれ、綿花栽培を始めるに至ったと語った。

日本における綿作・綿業は、15世紀末から16世紀中頃に始まったとされる。綿はその保温性・吸湿性・肌触りの良さにより、またたく間に全国へと普及していった。しかし、明治29年の輸入関税撤廃を契機として安価な外国産綿が流入し、国内の綿花栽培は急速に衰退した。

現在では、市民団体、個人、福祉施設、企業、営農など、さまざまな主体が綿花栽培に取り組んでいる。例えば、市民活動においては伝統文化の保存・継承の一環として、個人では趣味やフラワーアレンジメントの素材として、福祉施設では教育プログラムや就労支援の場として活用されている。企業においては自社ブランドの価値向上を目的とした取組が見られ、営農の現場では遊休農地の活用や花卉としての出荷を視野に入れた栽培が進められている。

2000年頃よりこうした動きは徐々に広がりを見せ、2011年には「東北コットンプロジェクト」が発足するなど、綿花への関心は高まりつつある。一方で、担い手の拡大に向けては、育て方の標準化や作業負担、収益性、目標設定といった課題に加え、信頼性のある情報発信の仕組みづくりも重要であると指摘された。

梅田氏は、綿には工芸・教育・福祉・農業・観光・商業など、さまざまな分野での活用の可能性が秘められており、特に高齢者との異世代交流や地域づくりの場としても大きな可能性があると述べた。綿を「育て」「触れ」「つむぐ」過程を通して、人と人、人と自然がつながっていく綿には、そうしたつながりを生み出す力があると強く感じさせられる講演であった。

2.2 質疑応答

梅田氏の講演後、質疑応答の時間が設けられた。

「洋綿と和綿はどう違うのか？」という質問に対して、梅田氏は「洋綿は長く細い長纖維で強度が高く、機械紡績に適している。一方、和綿は短く太い短纖維



で、ふっくらとしており、手つむぎや手織りに向いている」と述べられた。実際に洋綿・和綿の両方を栽培されている梅田氏は、当日それぞれの綿花を持参され、参加者が実際に触れる機会が設けられた。参加者は両者の違いに直接触れ、その違いに深い関心を示していた。また、「本当に綿花の国産自給率は0%なのか?」という問い合わせに対しては、「農林水産省による調査は昭和40年で終了しており、現時点での具体的な統計データは存在しない。そのため、我々が2025年に開催予定の“全国コットンサミット in 天理”において、独自に調査を実施する計画である。」との見解が示された。

さらに、「なぜ今回、学生会は梅田氏に講演を依頼したのか」との質問に対して、学生会運営委員は次のように回答した。「綿はサステナブルな素材であり、繊維原料としてはポリエステルに次ぐ使用量を誇る。脱石油が求められる中、そして国際情勢が不安定な今、綿花のサプライチェーンを海外に依存している現状に課題を感じた。加えて、私たち自身を含め、多くの人々が“服が何から、どのように作られているのか”を知らないという現状を踏まえ、“服育”的観点も込めて、実際に綿花の栽培と加工に携わっておられる梅田氏にご講演をお願いすることとした。」と述べた。

3. 学生会運営員の声

ここでは、学生会運営委員がセッション内容やその準備過程で感じたことや考えたこと、意見をまとめるとある。

今回の学生セッションでは、国産綿花の栽培・加工に実際に携わっておられる梅田様から、現場の課題や展望について直接お話を伺うことができた。これまで衣類を選ぶ際に素材やその背景に意識を向けることは少なかったが、今回の学びを通じて、身近にある「綿」という素材に対する関心が深まった。特に印象に残った

のは、個人レベルで綿花栽培に取り組んでも、収穫後の処理や流通に課題が多く、サプライチェーンに組み込むには大きな壁があるという点である。その解決には、受け入れ先となる企業の台頭が不可欠であり、さらにその間に行政が介在することで、生産者に対する企業の信頼が生まれ、流通構造の構築に寄与するという梅田様の指摘は非常に示唆に富んでいた。また、本セッションでは講演だけでなく、実際に綿花に触れてみる体験の時間も設けられた。これは聴講者だけでなく、我々学生運営委員にとっても貴重な経験であり、綿花のもつ手ざわりや温かさを肌で感じることで、より深い学びと実感を得ることができた。

学生の立場から繊維産業の課題を発信し、企業や研究者、生産者、そして学生との間で対話を実行したこと、大きな意義があったと感じた。また、梅田様や学生会運営委員、顧問の先生方と連携しながら、メールのやりとりや会議の設定、当日の司会進行に取り組んだ経験は、自身の成長にもつながるものとなった。また、セッション終了後には、梅田様と聴講者の方々との間で自然な交流が生まれていた様子が非常に印象的であり、この場が人と人をつなぐ起点となったことを心から嬉しく感じている。 [岡本泰輝（岡山大学）]

今回の学生セッションでは、「ゼロから紡ぐ国産コットンの未来」をテーマに、綿花農家の梅田様をお招きし、貴重なお話をうかがうとともに、学生や参加者との活発な意見交換を行うことができた。これまで私は、衣服を選ぶ際にその原料について深く考えることはなかったが、今回、実際に綿花を目にし、その特徴や栽培の背景について学ぶ中で、綿という素材をより身近に感じるようになった。また、国産綿花の現状について理解を深めるとともに、持続可能な繊維産業の実現に向けた課題や可能性について考える良い機会ともなった。本セッションを通じて、衣服を原料の視点から見つめ直すことができ、大変有意義な学びとなつた。 [神田成輝（岡山大学）]

今回のセッションでは綿花栽培に携わる梅田様をお招きし、日本の綿花産業の現状と課題について知識を深め、会場の企業の方や先生方も巻き込んでより深みのある議論ができたと思う。また、実物の綿花を触り比べることで参加者の皆さんも興味を持って話を聞かれている方が多い印象を受けた。何より和やかな雰囲気で気負いせずに楽しんで参加できたことが学生委員として嬉しかった。

[平尾 元（岡山大学）]

今回の学生セッションを通じて、纖維産業の根幹となる国産綿花栽培の現状について学ぶことができた。纖維製品は私たちの生活に身近でありながら、その原料である綿花の自給率が極めて低いこと、また栽培にかかる手間やコスト、気候の影響など、国内生産の難しさを改めて認識した。会場からは想像以上に多くの質問や意見をいただき、関心の高さを実感することができた。また学生セッションを通じて他大学の学生や社会人の方々との交流が生まれ、とても貴重な経験となった。この経験を通じて学んだ国産綿花の現状、また綿の魅力と可能性の広がりという部分を私も様々な人に伝えていきたいと感じた。

[多根井克生（京都工芸纖維大学）]

服の大量生産・大量消費・大量廃棄は社会課題の一つとしてしばしば取り上げられている。私は、綿花栽培や機織り、編み物、服作りを趣味としている。サプライチェーンのすべてをひとりで体験することで、衣料生産の大変さを感じ、できるだけ大切に一着一着を扱うことを心掛けている。生産現場と消費現場を近づけることこそが、課題解決の糸口になると信じている。私たちの生活を送るうえで欠かせない要素である「衣」「食」「住」のうち、「食料自給率」の問題はよく話題にのぼる。一方、「衣料自給率」の注目度は非常に低く、ほとんど0%に近い値であることを知っている人は少ない。国内で原料を目にする機会が少ないと危機感を感じ、学生セッションのテーマ案として「綿花の国内栽培の未来」を挙げた。梅田様、纖維機械学会の顧問の先生方、学生運営委員の皆様のご尽力のお陰で、本テーマを実施できたことに深く感謝したい。梅田様は、綿花栽培を起点に福祉や教育の課題解決に尽力されており、国内での綿花栽培は多様な課題解決につながるポテンシャルを持っていると感じた。本セッションを機に、我々運営委員のメンバー、当日ご聴講いただいた皆様から、国産綿花の未来が切り開かれていくことを期待し、私自身も何ができるかを日々考えていきたい。

[南かのん（慶應義塾大学）]

4. 講演者の声

本セッションの講演者である梅田氏より、学生会運営やセッションの取り組みに対するご感想をいただいたので、以下にご紹介する。

「このたびは大変貴重な学びの機会をいただくことができましたことを、まず心よりお礼申し上げます。事務局様より最初にご連絡をいただきましてから、学生会運営委員会委員長の岡本様からつづけて丁寧なご挨拶、そして細やかな連絡をいただき、2回におよぶオンライン会議も設定下さいました。その中でみなさんの「少しでも実りあるものにしたい」とのお気持ちがひしひしと伝わってくるような感激を味わいました。講演終了後には、全国コットンサミット開催にあたり、日本纖維機械学会様への後援名義申請をアドバイスください、それがきっかけで国立研究開発法人産業技術総合研究所（産総研：AIST）様からも後援をいただけることになりました。もし近い将来に国産綿花のサプライチェーンが世間の話題になることがあるとすれば、それは紛れもなくみなさんが播かれた種のおかげです。学生スタッフ皆様の今後ますますのご活躍を心よりお祈りしつつ、楽しみにいたしております。ありがとうございました。」

5. まとめと展望

本年度の学生セッションでは、「ゼロから紡ぐ国産コットンの未来」というテーマのもと、綿花農家である梅田氏を講演者に迎え、国産綿花の現状や課題、そしてその先にある展望について、参加者とともに多角的に考える貴重な機会となった。綿は、我々の生活において最も身近な纖維でありながら、その生産背景について深く知る機会は限られている。今回のセッションを通じて、実際の栽培現場の状況や国産自給率の低さ、さらにそれに立ち向かう様々な取り組みに触れたことで、衣服の原料に対する理解と関心が一層深まった。また、学生会運営委員自らが講演者との調整、進行管理、広報活動などを主体的に担うことで、実践的な企画運営の経験を積むとともに、企業・研究者・生産者・学生といった多様な立場の参加者と意見を交わす中で、纖維産業の未来について主体的に考える姿勢を育むことができた。今後も学生会として、社会課題と纖維産業とを結びつけるテーマを積極的に取り上げ、学生ならではの柔軟な発想と行動力をもって、学会のさらなる活性化と産業の持続的な発展に寄与していきたい。



【学生会（第五期）運営委員】

委員長：岡本 泰輝（岡山大学）
副委員長：神田 成輝（岡山大学）
委員：平尾 元（岡山大学）
多根井克生（京都工芸繊維大学）
南 かのん（慶應義塾大学）